

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

須田 昂宏

論 文 題 目

講義型授業における
学生の学びの分析手法の開発
—大学の授業を対象として—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 渡邊雅子

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 坂本將暢

名古屋大学大学院教育発達科学研究科特任教授 大谷 尚

論文審査の結果の要旨

本研究では、大学の講義型授業を対象として授業過程の中で学習者が具体的にどのように学んでいるかを明らかにするために、①授業における学生の表出行動と②授業直後に学生が筆記するリアクションペーパーの2つに着目し、それらを分析する手法の開発に取り組んでいる。表出行動とは、話者の凝視やうなずきなど、他者の行動に対するふとした反応であり、内面が表出する行動を意味している。また、リアクションペーパーとは、大学の授業において学生が授業に対する反応を記入したものである。これらに焦点を当てて大学の講義型授業における学生の学びを具体的に解明することを試みている。

従来の大学の教育改善・授業改善に関する研究は、授業のノウハウの蓄積に関する研究や授業の総括的な評価に関する研究が中心であった。これらの研究は簡便でありかつ、授業改善に対する一定程度の効力が認められるが、実践の具体的な改善には結びつけにくいという問題点も見られた。

そこで本研究では、講義型授業における学生の学びを分析するための手法を開発することを目的としている。特に、学生たちがどのような授業あるいは授業場面において「内的に積極的・能動的に聴く」という学びを行うかを明らかにする。本研究における「内的に積極的・能動的に聴く」とは、「講義内容に興味をもち、その上で、既有知識や経験に関連づけたり、思考したり、疑問を覚えたりなどの知識の再構成を行いながら講義を聴く」という意味であり、情意面から見ても認知面から見ても望ましい状態にある学びを示している。

まず、第1章では、研究背景を概説し、本研究の目的を述べている。

次に、第2章では、「講義とは何か?」、「講義型授業において求められる学びとは何か?」、「学びの分析にはどのような方法があるか?」を先行研究を通して検討し、本論文で開発する分析手法の構想を明らかにしている。その結果として本論文では、「積極的に聴く」を分析するために表出行動を用いること、「能動的に聴く」を分析するためにリアクションペーパーを用いることにした。

第3章では、「表出行動」に関する研究動向の検討を行っている。その結果、これまでの研究では、経験的・感覚的なものにとどまる、実験室的である、包括性がないといった問題点があることが明らかとなった。

第4章では、「表出行動」に基づく学生の学びの分析手法の開発を行っている。具体的には、まず学生の表出行動と内的状況とがどのように関連しているかを明らかにした上で、その表出行動の出現パターンに基づいて講義型授業における学生の学びを分析している。その結果として、第一に、授業者を見る量が多い学生ほど授業の理解度が高いこと(ただし学生の多くが学びに対して積極的な授業ではこの限りでない)、自発的なメモが多い学生は興味度が高い傾向にあるが理解度は必ずしも高いとは限ら

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

いこと、ほおづえは理解・興味のいずれとも高い相関はないこと、居眠りは理解度とは負の相関であるが興味度とは必ずしも相関があるわけではないことが明らかとなった。第二に、学生たちが学びに対して消極的である授業では学生は興味深い授業場面で授業者を見る量が増加する傾向があり、学生たちが学びに対して積極的である授業では学生は興味深い授業場面で微笑みや自発的なメモの量が増加する傾向があることが明らかとなった。またこれらの知見を用いて、学生たちが学びに対して消極的である授業 1 事例と積極的である授業 1 事例における教授法の特徴を分析し、前者では講義の各所に余談（授業の本題とは必ずしも関係がないがおもしろい話）を挿入するという形で学生たちにとって興味深い授業場面がつくられているのに対し、後者では学生たちと本時の話題との結びつけ、認知的切実性のある問いの提示、布石の使用、重要場面でのユーモアの使用など多様なムーブ（手法）によって授業全体を知的で興味深いものにしようとしていることが明らかとなった。

第 5 章では、「リアクションペーパー」に関する研究動向の検討を行っている。その結果、これまでの研究では、「分析のプロセスや根拠が決まっていなかったり見えなかったりするがゆえに高度な専門性が必要になる」、「学びの具体性を排除してしまったり学びの一側面しか捉えられなかったりする」という難点があることが明らかとなった。

第 6 章では、「リアクションペーパー」に基づく学生の学びの分析手法の開発を行っている。具体的には、「学びの具体性の保持」と「分析手続きの定式化」を両立するような新たなアプローチを構築している。リアクションペーパーの記述内容を構造化されたデータに変換し、クロス集計表に整理し、コレスポネンス分析とバブルチャートを適用することによって、「授業トピック」と「学びの類型」の質的・量的な関連構造を可視化することを可能にした。さらには、開発した可視化手法を用いて事例検討を行いことにより、学生自身にも既存の興味関心や知識があり、授業トピックにも「新奇性」、「不一致性」、「不明瞭性」などといった刺激が含まれていて両者の相互作用が起こるときに、【思考】を中心とした「能動的に聴く」授業が成立するという構造が明らかとなった。

第 7 章では、結論と課題を述べている。

以上の研究成果に対しては、以下のような意義があると考えられる。

(1) 大学授業の評価について、従来は、受講者の総括的な印象や、授業者の非定型的な解釈に頼らざるを得ない面が強かったが、標準的な手順によって分析できる手法を開発している点。

(2) アクティブ・ラーニングや反転授業などへの注目が集まる中、本研究では、あえて伝統的な講義形式の大学授業に着目し、「内的に積極的・能動的に聴く」と

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

いう望ましい状態を、外的に観察可能な表出行動と記述内容のカテゴリーとして把握しようとしている点。

(3) 少数の事例ではあるが、2つの事例における受講者の行動を仔細に分析することにより、授業への興味や理解度と、表出行動の関連の違いを明確にしている点。

(4) リアクションペーパーの分析に、学生の思考を中心とする「能動的に聴く」という学びが成立する要因を明らかにしている点。

一方、審査委員からは、本論文に対して以下のような質問や意見が提示された。

(1) 従来のような授業全体に対する学生の総括的な印象ではなく、本研究が場面を限定した学生の印象の報告にもとづき、興味があった場面の表出行動の特徴が明らかにされている点に意義はみられるが、さらに分析を進めて学習者の意識下の「フロー」の状況を同定し、それがどのような諸要因の関連において成立しているかを明らかにすべきではないか。

(2) 本研究において一般性をどのように考えるのか。単に事例を増やすということによって、どの講義にも当てはまる一般的な法則性を明らかにすることが本研究の目ざしているところとしてふさわしいのか。事例の代表性を担保した大規模な調査ではなく、事例に基づく研究であるため、一般性に対して異なる見方でアプローチする必要がある。事例によって知見の一般性が限られているということは弁明としてふさわしくなく、それでは事例をいくつ積み上げても研究が終了しないことになる。

(3) 「講義」をどうするのかという問いを発端としているが、より本質的な問いとして「講義とは何か」や、「講義における学びの可能性とは何か」を明らかにするように研究が展開されるべきではないか。

(4) 「学習」あるいは「学修」ではなく、「学び」という概念が初等・中等教育から高等教育に拡大してきており、本研究でも「学び」を採用しているが、その概念を用いることの適切性や影響を考慮する必要があるのではないか。

(5) 初等・中等教育を対象に発展してきた授業研究の系譜において、本研究が果たす意義はどこにあるのか。理論、方法、実証における貢献は何か。

(6) ICTの活用など、講義の形態が拡大しているが、それに対しても本研究の方法や知見が適用可能であるか。

(7) 今回対象としている以外の大学での講義への適用可能性はあるか。

これらの指摘に対して、博士学位請求者はよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。また、課題として残された点も今後の研究の発展に期すべきものであり、解決される可能性は十分に高いものと判断される。以上を総合して、審査委員全員一致して、本論文を博士（教育学）の学位に値する研究成果であると判断し、「可」と判定した。